第四百六十回　青葉会句会報　　令和六年八月二十二日(木)　　夏休み誌上句会

選　　者　川口孤舟

投句・選句　今井紀久男　柿崎忠彦　川口孤舟　久米五郎太　熊谷くにお　後藤とみ子　小早健介
在間千恵　佐藤ただしげ　高橋康敏　田島正己　土谷堂哉　豊田ゆたか　中川雅夫
西澤國護　長谷見びん　福島正明　古田昇　古川百合子　星田啓子　宮内規雄
山田けい子　山内天牛　渡邊盛雄

選句のみ　伊賀山そらお、梅崎くすを　重枝孝岳　庄司龍平　高橋清子　橋口隆　早川允章
山崎亜也　山本三恵

【互　選　句】○は会員選者の選による「天」　◎は孤舟選者の選

九点

◎赤い緒をすげて郡上の踊り下駄　康敏
(そ・紀・孤・五・健・と・た・堂・天)

蜩や名門ホテル廃業す　堂哉
(紀・くす・く・國・千・允・正・亜・天)

灯を消して山荘虫の闇となる　國護
(そ・紀・健・千・清・百・昇・啓・け)

パオに寝て大草原の星月夜　昇
(○そ・紀・く・國・と・千・龍・康・允)

◎炎昼や顔火照らせて孫来たる　天牛
(紀・そ・くす・孤・た・龍・國・昇・百)

八点

津軽弁ふと口に出る墓参り　忠彦
(そ・紀・五・清・堂・隆・允・亜)

被爆樹に熊蟬鳴くや広島忌　くにお
(紀・忠・○と・た・ゆ・隆・昇・百)

◎かなかなの季の移ろひを告げるかに　とみ子
(紀・孤・孝・ゆ・び・允・昇・規)

◎西日射す部屋に転がる鉄亜鈴　康敏
(紀・孤・く・國・堂・雅・び・啓)

玄奘も見しか砂漠の天の川　昇
(紀・くす・く・國・健・龍・己・け)

七点

◎朝顔の色映してや今朝の空　ただしげ
(紀・孤・五・ゆ・國・雅・規)

気怠さと罪の名残のある残暑　正明
(紀・孝・○び・○啓・三・け・盛)

六点

峰雲や悲願に届くヤリ一投　健介
(五・千・康・己・堂・び)

黒猫とからまる視線炎天下　千恵
(紀・清・雅・啓・亜・け)

◎糊固き浴衣に包む身のほてり　康敏
(紀・くす・孤・龍・清・雅)

絡みつく情念ふかし凌霄花　百合子
(紀・孝・雅・規・天・盛)

夏帯を解きていつもの私かな　けい子
(紀・龍・清・康・己・啓)

今日ありて新酒たしなむ老の夜　盛雄
(紀・○くす・ゆ・○國・○允・三)

五点

坂灼くる仁王に似たる顔に遇ひ　とみ子
(紀・孝・康・百・啓)

阿波踊かかりつけ医は白衣連　仝
(紀・○健・○堂・雅・盛)

宙を舞ふスケートボード巴里の夏　康敏
(紀・堂・隆・正・天)

四点

◎雨上がり欅並木は蝉時雨　ただしげ
(紀・孤・規・け)

不忍の風の音（ね）も良し蓮見台　仝
(紀・く・國・三)

巴里夕立聖火かかげて騎士走る　びん
(紀・そ・啓・亜)

秋立つやこころなしかの夕の風　啓子
(己・た・隆・百)

夏五輪槍投げ金で極まれり　天牛
(紀・忠・正・○盛)

秋立つや伊丹銘酒に風の音　盛雄　（紀・〇己・び・三）

（帰省の息子とほんの少し冷酒を酌む一夜）

三点

◎　桐竹勘十郎の人形遣い

濡れ事も荒事も涼しい顔のすまし顔　紀久男　（忠・孤・隆）

回復せず妹に託す盂蘭盆会　仝　（隆・び・盛）

鳩までも木陰に集まる暑さかな　忠彦　（紀・〇孝・國）

風を得て鷺草あわや飛ぶ構へ　孤舟　（紀・健・啓）

消しゴムで消せぬ雲あり原爆忌　仝　（紀・正・〇昇）

芝居はね今に戻りて暑気払ひ　五郎太　（紀・忠・た）

朝一度休息与うクーラーに　千恵　（紀・と・國）

宴会の喧騒さりて盆の月　正己　（く・國・規）

茄子の馬母の口癖へたやねえ　堂哉　（紀・千・び）

湿風は沈める老いをあわれむや　雅夫　（紀・孝・規）

酔芙蓉とくとくと酔いまわり　百合子　（五・ゆ・〇三）

◎行く夏や波に攫はる砂の城　昇　（孤・康・允）

心眼で狙ひ定めて西瓜割る　仝　（千・正・天）

二点

リハビリ病院のご褒美

自転車漕ぎ冷やしあん蜜堪能す　紀久男　（と・天）

稲妻の音聞くまでの静けさよ　忠彦　（健・規）

蒲の穂を供花に加へて墓参り　くにお　（紀・國）

金の子もメダルなき子も夏終わる　健介　（紀・た）

幼き日塩かけはしゃぐ西瓜かな　正己　（百・亜）

セーヌ暮れて短夜照らす気球浮く　びん　（と・盛）

流燈の三途の川を渡るかに　昇　（紀・五）

闇（くら）きより出でし蝉なり煌めける　啓子　（紀・け）

羅や苦き想ひ出ふたつ三つ　仝　（紀・くす）

天河の神の声聞く文月かな　けい子　（紀・三）

役すみしゴルフクラブや捨案山子　盛雄　（紀・己）

ベートーヴェンを聞き分け集ふ奈良の鹿　仝　（紀・忠）

一点

都心にも短き命蝉が鳴く　忠彦　（ゆ）

オリンピック松山晴れやか夏のパリ　仝　（紀）

竹婦人賞味期限の疾うに切れ　孤舟　（紀）

夾竹桃三点シュート決まりけり　五郎太　（紀）

ふわりと聖火夏の巴里の夜空へ　千恵　（康）

源内も高笑いする土用の丑　ただしげ　（紀）

盆僧と互いの父の癖仕種　堂哉　（紀）

秋天の下にごろ寝の猫なるや　ゆたか　（清）

京の月仰ぎて里の月想う　仝　（龍）

蝉鳴くや人作りしと熱き日を　雅夫　（亜）

夏散歩傘に顔埋め手には水　國護（昇）
猛暑では蝉も隠れて声もなし　仝（忠）
炎天下孫の手を借り芝を刈る　仝（規）
「パリ祭」の名画思ほゆ五輪かな　びん（紀）
万国の平和を祈る夏の月　仝（〇正）
歳忘るフラダンスとか花芙蓉　盛雄（紀）

【句評・短評】

九点句　**赤い緒をすげて郡上の踊り下駄**　**康敏**

孤舟選者・・・郡上踊りの素朴な華やかさ。
五郎太さん・・・お盆の四日間は徹夜で踊るとか。
とみ子さん・・・紅い緒から 郡上踊りの下駄を鳴らして踊る景が見えるようです。
ただしげさん・郡上踊りの赤い鼻緒の下駄、何となく艶めかしい感じです。
堂哉さん・・・踊りが目に浮かんで来ます
天牛さん・・・風の盆は行きましたが郡上躍りは行っていないのが残念です。「すげる」がいいですね。
紀久男・・・・嘗て西宮独身寮長をしていた時、会社が終わる時間に貸切バス一台を仕立て、会社に横付けにし、超満員で行ったことを思い出します。好評でした。

蜩や名門ホテル廃業す　**堂哉**

千恵さん・・・老舗の消えてゆくのは寂しいのものですね。季語が寄り添っていると思います。
亜也さん・・・駿河台辺り？そうなら一応休業。建物が残らなければ同じこと…
天牛さん・・・名門ホテルがなくなるのを悲しむように蜩が鳴いているのですね。うまい取り合わせです。

灯を消して山荘虫の闇となる　**國護**

千恵さん・・・こんな時間も贅沢。
百合子さん・・・暗闇のなかですだく虫たちの大合唱、耳を澄ませばさまざまな虫たちが命のかぎり唄っている！
啓子さん・・・中七、下五で作者の居られる環境が良く判ります。上五がより良いですね。

パオに寝て大草原の星月夜　**昇**

とみ子さん・・・広々として良いですねー。訪ねてみたいです。日本にも象潟にパオ施設あるような。
千恵さん・・・スケール大きいですね。一生に一度くらいこんな体験があっても。。。
康敏さん・・・こんな雄大な体験をしてみたかったです。

炎昼や顔火照らせて孫来たる　**天牛**

孤舟選者・・・爺婆に会える興奮に顔を紅潮させて。
ただしげさん・おじいさまにはうれしく且、いとおしい風景ですね！
龍平さん・・・でも　若いのが部屋に入ってくると俄に温度急昇　カナワン
百合子さん・・真っ赤な顔をしてやって来た孫の可愛さ「おうおう、よく来たねえ、さあさあ冷たい西瓜をお食べ！」という声が・・・

八点句

津軽弁ふと口に出る墓参り　　忠彦

五郎太さん・・上手です。標準語で育った私には欠けている思いです。
堂哉さん・・・東京の従兄弟も関西の従兄弟も尾道では広島弁がチラホラ出て嬉しいです。
隆さん・・・・故人とは故郷なまりでないと通じない。
亜也さん・・・久しく故郷を離れていたとの思いかさりげなく伝わってくる。

被爆樹に熊蟬鳴くや広島忌　　くにお

とみ子さん・・西日本の朝は熊蟬が一斉に鳴きます。その日もそういう平和な光景が、あつたことでしょう。
ただしげさん・真夏の広島忌、中七で暑さが募ります。
ゆたかさん・・被爆者を弔うようにセミが鳴いている心情深い句です。
隆さん・・・・「被爆樹を四肢掴み鳴く油蟬」でも。
百合子さん・・毎年観るテレビの画面、あの日も熊蟬が鳴いていたんだろうなあ！
紀久男・・・・季重なりですが捨てがたい好句です。

かなかなの季の移ろひを告げるかに　　とみ子

孤舟選者・・・夏のみんみん、にいにいから、秋のかなかな、ちっちへと季節は動いてゆく。

西日射す部屋に転がる鉄亜鈴　　康敏

孤舟選者・・・西日の熱で鉄亜鈴は熱く重くなったようだ。
堂哉さん・・・正に我が家の2.5キロの2つの亜鈴です。
啓子さん・・・家に居る日常のひとこまを、鉛筆か油か、言葉で絵にされているようです。

玄奘も見しか砂漠の天の川　　昇

龍平さん・・・パリから西へ1500キロのサンティアゴ・デ・コンポステーラ(Campo de la estrella のスペイン語が縮まり〝星の輝く地〟の意味との説有り)迄、半砂漠や屹立した岩山を越えての中世ヨーロッパでの巡礼は最盛期を極めた〈堀田善衛＝スペイン断章〉
聖なるものに縋る気持ちは古今東西代わり無し。日本ならお伊勢参りか、ワシも年に2回は伊勢志摩には行くが・・動機はともかく。

七点句

気怠さと罪の名残のある残暑　　正明

啓子さん・・・今年は特に湿度の高い酷暑でした。家に籠ることも多く、畢竟、現在の世相と共に来し方を思う時間も多くなった。後悔は罪に繋がり、ひそやかに胸に。

朝顔の色映してや今朝の空　　ただしげ

孤舟選者・・・朝顔の鮮やかな藍色が空に投影されている。
五郎太さん・・まだ涼しい朝、今日は暑くならないといいが。
ゆたかさん・・空色の朝顔と青空のかけ合わせが見事です。

六点句

峰雲や悲願に届くヤリ一投　　健介

五郎太さん・・期待によく応えた65.80米。北口選手お見事でした。
千恵さん・・・東京五輪時の１２位からの金メダル！豪快でしたね。ちなみに父上はパティシエだそうです。
康敏さん・・・ヤリ投げ北口榛花の金メダルへの一投。峰雲に届かんばかりに。三年前の東京五輪とは異なり、今回のパリ大会には多くの投句がみられました。素晴らしい

挑戦です。

堂哉さん・・・見事な一投でしたね！

黒猫とからまる視線炎天下　　千恵

啓子さん・・・日中の外出。この炎天下になにやら視線を感じたのでしょう、ふと黒猫と目が合いました。どうしたの？アンタこそなんだよ！ふいと目を反らず黒猫、ふとした会話がありましたね。視線が絡む・・中七に惹かれました。

亜也さん・・・からめる相手は普通は人。それが猫なのがドキリとさせて秀逸。

糊固き浴衣に包む身のほてり　　康敏

孤舟選者・・・ゴワゴワした浴衣は放熱効果が低いようだ。

絡みつく情念ふかし凌霄花　　百合子

天牛さん・・・凌霄花に情念を見たのはデカルト的ですか。（カルテジアンか？）

夏帯を解きていつもの私かな　　けい子

龍平さん・・・何かドキッとしました！この句。

康敏さん・・・猛暑のなか体を締め付けていた帯を解いてやれやれ。

参考〈夏帯を解きて貧しき妻にかへる　榎本蒼水〉

啓子さん・・・夏の和服はどこか艶めかしい。が、歳重ねこの暑さに、私には遠いものとなった。お稽古の後でしょうか、汗だくで帰宅しての着替え。一連の動きが見え、解放された感がさわやか。

今日ありて新酒たしなむ老の夜　　盛雄

ゆたかさん・・老いてなお元気なことをありがたく思いながら酒をたしなんでおられるのです

国護さん・・・何と気品のあるお年寄りでしょう。

允章さん・・・私の心境にぴたりの句です。

五点句

坂灼くる仁王に似たる顔に遇ひ　　とみ子

康敏さん・・・今年の暑さは格別だ。焼け付くような坂を上って来る人は、顔を真っ赤にして汗だらだら、憤怒の仁王様さながらだ。

百合子さん・・灼熱の暑さのなか、喘ぎあえぎ坂を登る、私も仁王になっちゃいます。

啓子さん・・・それは炎帝だったのかも・・上五で既に如何に暑いかの表現に成功、そこに上り来る人を観察されての言葉の選択に感服。

阿波踊かかりつけ医は白衣連　　とみ子

健介さん・・・なるほどと納得、風刺も効いていますね。

堂哉さん・・・元気な方で頼りになりそうなお医者さんですね。ユーモラス。

盛雄さん・・・一泊二日で二度参加しましたが、なかなかに愉しいものです。中七・下五が面白い。

宙を舞ふスケートボード巴里の夏　　康敏

堂哉さん・・・初めて見て驚きました！やっかいな若者の憂さ晴らしとばかり思っていました

隆さん・・・・パリの街は美しい。日本は再開発一本やりで美しい街どころではない。

天牛さん・・・近所でゴーゴーという音がもう、うるさいと思っているうちに世界的競技になりましたね。

四点句

雨上がり欅並木は蝉時雨　　ただしげ

孤舟選者・・・一斉に鳴く蝉の声が、しっとりとした空気を震わせている。

巴里夕立聖火かかげて騎士走る　　びん

啓子さん・・・そう、覆面の騎士。あの雨の中粛々と縦横に走り、跳ぶ。時として宙返りまでして見せ、何とも心にくい演出でした。それを走馬灯のように思い出させるこの句の力・・。それにしてもあれは誰だったのでしょう・・？

亜也さん・・・あの印象的なシーンも雨のおかげで句になる。

秋立つやこころなしかの夕の風　　啓子

ただしげさん・なんとなくひんやりした風、中七の表現が良いですね。

隆さん・・・・細やかな視点。「秋立つや風も冷たき夕となる」でも。

百合子さん・・暑い暑い毎日が続いていますが、あっ、いまの風はと、まさしくこの句を先日来実感しています。

夏五輪槍投げ金で極まれり　　天牛

盛雄さん・・・日本人にあんなに笑顔が素敵な逞しい女性がいて嬉しかった。パリの夜に締めの一投。

秋立つや伊丹銘酒に風の音　　盛雄

（帰省の息子とほんの少し冷酒を酌む一夜）

正己さん・・・いつ飲んでもおいしい銘酒ですが、秋の気配を感じながら飲む酒はまた風情ありますね。

三点句

桐竹勘十郎の人形遣い　　紀久男

濡れ事も荒事も涼しい顔のすまし顔

孤舟選者・・・熟練の人形遣はどんな動作も自在にやりこなす。

隆さん・・・・面白い視点。「濡れ事も荒事も涼しすまし顔」でも。

回復せず妹に託す盂蘭盆会　　紀久男

隆さん・・・・回復祈念します。ご長男の存在感。

盛雄さん・・・体調不良で実家での盆の行事に参加出来ない辛さが上五に滲んでいる。

鳩までも木陰に集まる暑さかな　　忠彦

孝岳さん・・・今年の異常な暑さを象徴している。鳩にも熱中症アラートを発令したのかな。

消しゴムで消せぬ雲あり原爆忌　　孤舟

昇さん・・・私は昭和二十二年、原爆ドームの近くで生を受けました。少年時代に何度も観た「きのこ雲」の映像は今でも網膜に焼き付いて消えません。

芝居はね今に戻りて暑気払ひ　　五郎太

ただしげさん・お芝居を楽しんだ後の暑気払い、お芝居の世界から、現実に帰る中七の表現が面白い。

朝一度休息与うクーラーに　　千恵

とみ子さん・・クーラー活躍の今夏こそ、クーラーに休息が必要かもしれません。クスッと笑いました。

国護さん・・・クーラーは今や命綱。

茄子の馬母の口癖へたやねえ　　堂哉

千恵さん・・・昔母親に言われた懐かしい言葉かも。

びんさん・・・母御のひとことなんともいいですね。

酔芙蓉とくとくと酔いまわり　　百合子

五郎太さん・・佳い人と飲むお酒は格別です。

ゆたかさん・・酔芙蓉と酔いまわるの語呂合わせが見事です
三恵さん・・・まるで芙蓉が酔っ払ってグルグル、フラフラ、きっと千鳥足の句者とシンクロしているのでしょう。とにかく語呂が良くて、リズミカル。楽しんでます。

行く夏や波に攫はる砂の城　　昇

孤舟選者・・・夏の賑やかさから秋の静けさに移ってゆく。
康敏さん・・・波に攫われた砂の城に、夏の終りを感じる。夏休みも終り楽しかった夏の名残を惜しむ句ですが、今年は危険な猛暑日の連続とゲリラ豪雨が未だ続いています。気候変動で季語と現実が合わなくなって来ました。

心眼で狙ひ定めて西瓜割る　　昇

天牛さん・・・「心眼」がきいていますね。柳生流でしょうか。

二点句

リハビリ病院のご褒美

自転車漕ぎ冷やしあん蜜堪能す　　紀久男

とみ子さん・・リハビリに励まれたあとのあん蜜の味は、格別でしょう。
天牛さん・・・自分の経験で自転車漕ぎも程々に。

蒲の穂を供花に加へて墓参り　　くにお

国護さん・・・八月十二日のお花市思い出す。
※康敏さん・・・蒲の穂（夏）と墓参り（秋）の季重なりです。

金の子もメダルなき子も夏終わる　　健介

ただしげさん・上五、中七の表現が面白い。

幼き日塩かけはしやぐ西瓜かな　　正己

百合子さん・・昔、母に塩をかけてみる?と言われてから、その甘じょっぱい美味しさに私は『西瓜に塩派』になりました。また、納豆には砂糖を少々。この『納豆に砂糖派』は新潟と北海道にいると聞きました。
亜也さん・・・いま面前ではしゃぐ子、その子が将来思い出す光景、それに自分自身の思い出。「幼き日」の措辞が呼ぶ不思議な懐かしさ。

セーヌ暮れて短夜照らす気球浮く　　びん

とみ子さん・・聖火が空に浮いたのは、驚きと感動でした。
※康敏さん・・・聖火気球の句ですが、動詞を三つも使い、詩と言うより散文調になってしまいました。

流燈の三途の川を渡るかに　　昇

五郎太さん・・今年のお盆も終わります。

一点句

都心にも短き命蝉が鳴く　　忠彦

ゆたかさん・・森林でなく都心の蝉の声をとらえたことが斬新です

ふわりと聖火夏の巴里の夜空へ　　千恵

康敏さん・・・破調ですが十七音に纏まっています。パリ五輪の開会式では数々の斬新な演出に驚かされましたが、中でも聖火気球は圧巻でした。

蝉鳴くや人作りしと熱き日を　　雅夫

亜也さん・・・IPCCによれば温暖化は人為。「熱き」なら季重なりはグレー?

「パリ祭」の名画思ほゆ五輪かな　　びん

※康敏さん・・・巴里祭は季語ですが、映画の題名は季語になりません。

万国の平和を祈る夏の月　　びん

正明さん・・・戦争がある限り心は晴れません　1日も早い平和を祈る者です。

■■■■■■■■■■■■■

【次回青葉会予定】

☆九月二十六日(木)　十三時～　三軒茶屋　新「しゃれなあど」(昭和信金三軒茶屋支店ビル)

○ご出句・ご投句の締切日を早めます（編集者の都合です。申し訳ありません！）

ご投句締切日　九月十二日(木)　厳守ください。

ご出句、ご投句の数は従前どおり。当季雑詠　句会参加者五句・ご投句の方は二句を目処に。

句会の後の段取りについて：メール使用の皆さまへの選句表配信が恐縮ながらいつもより遅く九月二十八日(金)となる可能性がございます。

※九月の選句締切は十月七日(月)とさせていただきます。

皆さまには、慣れた日程から大きく変化がありますため、面食らう方も多かろうと存じますが、何卒よろしく、ご協力賜りたくお願い申し上げます。

【青　葉　会　報】

一、　七月の猛暑により急遽の誌上句会に続き、八月は当初から予定しておりました本年二度目の誌上句会でした。会の皆さまの意欲も削がれず、且つ多くの方々から、佳句が多く選句に苦労したとのお言葉を頂いております。それが証拠のように、九点の最高得点が康敏さん、堂哉さん、国護さん、昇さん、天牛さんの五句、八点も五句で、忠彦さん、くにおさん、とみ子さん、康敏さん、昇さん、といったように九点、八点と康敏さん、昇さんが両方にお名前を連ねられました。七点、六点とその後も高得点がずらりと並んでおります。句評、短評も変わらず意欲的に取り組んでいただき、元気で愉しい句会報になったように存じます。編集作業をしつつ、なんとすてきなことか、と感動致しました。当方も実は思わぬ大きなミスもございましたが、何とか幾分早くに句会報が出来上がりましたので、まずはお送りする次第です。改めて誌上にて御礼申し上げます。ご協力ありがとうございました。

二、関係者近詠

孤舟選者　近詠

鰯干す浦曲の風を捌きつつ　　刻告ぐる「夕焼け小焼け」法師蟬

ニッポンの形に歪むへぼ胡瓜　　秋出水嘗ては駅に伝言板

盂蘭盆会来し方行方駆け巡る

三、「森の座」における関係者近詠は今回もお休みいたします。次回会報には掲載できるよう努めたいと存じます。

令和六年九月三日　　了